
無色の魔法士

パンプキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無色の魔法士

【Nコード】

N5031A

【作者名】

パンプキン

【あらすじ】

無力。昔も今も、病のように俺を苛むその二文字。力を求め、手に入れ、しかしそれでもなお足りない。高い代償を払い、強くなつたはずだった、だがそれでもなお足りない。

プロローグ

「遅かったわね」

気軽な口調で、彼女はそう言った。

肩越しにこちらを見つめる黒髪の女性は、微笑を口元に浮かべ、普段通りの調子で振舞う。普段通りの声で、普段通りの白いロングコートを身にまとう。この状況では、その普段通りが、ひどく不自然だった。

「でもちようど良かったのかも。もう少し早かったら私の準備も整ってなかったし、もう少し遅かったら、黙って行っちゃうところだったわ」

「あなたは……」

床一面に幾何学的な紋様が記された、大きな広間。そこに倒れ、痛みに呻く数人の男たち。十人ほどいた彼らは死んでこそいなかったが、床に伏せ、起き上がることもできないでいる。

叩き伏せられた男たちの中心で、こともなげにたたずむ女性に、彼は叫ぶ。

「あなたは、自分がなにをしたかわかっているのか!？」

「家出、かな？」

調子を変えず、女は答える。

床の紋様が、白い光を帯び始めた。部屋が細かい振動を始め、複雑で繊細な魔法式が力を持つ。地鳴りが、部屋を揺らした。正方形の部屋の床、壁、天井――その向こうで、機械が唸りをあげて稼働している。この部屋という装置が、機能している。

「転移魔法装置が起動した……?」

場に発生した力が、魔法式を駆けるのがわかった。気圧されるほどの膨大な力が、足元から立ち上る。圧倒的な存在感をはらんで、部屋は更に光量を増してゆく。

空間を屈服させるに止まらず、それを隷属させる程にまで力は増

大した。

「やっと、門が開いたわね」

「転移装置を無断で使用？ 有り得ない。老人たちの承認がなければロックを外せないはずだ。いやそれ以前に、俺たちの鑄像管理の禁忌コードに抵触する。できるはずがない」

「甘く見ないでほしいわね。ロックくらい外せるわよ。この扉の施錠も……」

彼女は、自分を示して言葉を続ける。

「私自身に掛かった鍵も」

「まさか……管理を解いたのか！？ 肉のない俺たちにとってそれがどういう意味か、わからないあなたではないだろう、レアリア！」

彼女の名を呼ぶ。

鑄像とは本来、型に溶かした金属を流し込んで作った像のことだった。肉という器のない彼らは、現状の形を失わないよう、別のものにならないよう、常に管理されていなければならない。管理とは、彼らが人でなくなるための道を閉ざす錠である。それが落ちればどうなるのか、容易に想像がつく。

人でいる術がなくなる。人から外れる。

人でなくなったとき、彼らがどうなるのか。それも、常識として知っている。

「確かに危険だったわ。だから、あなたになにも言わずにいたのよ、シリム」

彼女もまた、自分の名を呼ぶ。

光が、一際強くなった。場の魔力が臨界域に達し、空間が捻じ曲げられる。そのしわ寄せとでも言おうか、部屋の中央——レアリアのいる場所から、突風が吹きつけられる。大気が押し退けられ、風となって叩きつけられた。

シリムはその場に踏みとどまることができたが、部屋のあちこちで倒れていた男たちはそうもいかない。それぞれ吹き飛ばされ、壁に衝突する。

「行かせない！」

「無理ね。禁忌コードの生きているあなたじゃ、転移装置内で魔法を使えない。それでは止められない」

「非常時権限を行使すれば……」

「緊急事態発令が出ていないのに？ さっきからそれを待ってるようだけど、無駄よ。私はそんな間抜けじゃない」

おそらくは、警備装置にも手を回しているのだろう。彼女の行動を、中央が感知できないでいる。

万一にも転移装置を破壊できないよう、シリムはここで力を使うことを禁じられている。彼には、レアリアを止める手段がない。

これではまるで――

「そうか……」

力を得たはずの今でも、必要には足りない。得たはずの力を使えない。

無力。

「なら、連れ戻す。あなたがなんと言おうと、追って、そして捕らえる」

虚勢ではない。そう自分に言い聞かせる。

これは偽りではない。覚悟だった。

「ええ。待ってるわ、シリム」

光の中、レアリアの体が崩れた。体がノイズに乱され、砂に変じたように分解される。だが分解は一時的なものだった。任意の場所への転送後に、再び構築されなおす。

「必ず来なさいよ」

その声を置き土産に、崩れたレアリアの体が球体に圧縮され、消えた。どこか遠い場所に行ってしまったのだろう。転移技術がなければ、何万年も費やさねばならない距離にある場所へ。

少なくとも、この星にはもういない。

「……………」

転移が終了し、部屋は輝きを失った。肌を傷つけるのではないか

とさえ思えた圧力も、呆気なく霧散する。稼動音なくなる。

が、静寂の時間は刹那に等しかった。

装置の中心部が爆発。炎が膨れ上がり、シリムを巻き込むが、肉のない彼には微風と大差なかった。この程度で存在維持の持続に支障をきたすことはない。部屋の端に飛ばされた男たち——肉のある男たちは、爆発の範囲外にいて無事のようにだ。これも、彼女の計算の内だろう。誰も傷つけず、しかし誰にも止められず。

壁の向こうで、爆音が響いた。転移を行うのに必要な精密機械を、ことごとく破壊している。追っ手の足を止めるために、彼女が仕掛けて行ったのだろう。

火災に反応してか、今になって警報が鳴り響く。

「……くそ……！」

炎に巻かれて、彼は呻く。認めたくなかったが、それはまるで泣き声のようだった。

無力。昔も今も、自分はずっと。

「くそ……」

コキヨウ

「ここが、そうか……」

ぼそりとつぶやいて、その声が変声機にかけたような機械的な音になっていくことに気づく。顔の高さまで左手を持ち上げてみると、その輪郭がノイズ現象で歪んでいるのがわかった。眺めているうちにそれは徐々に収まっていったが、本来なら具象化が済んだ時点で構築は完璧なものになっているべきだった。

転移こそ成功したが、再構築の処理に難が残ったようだ。

「修理後の試運転は完璧だと聞いていたがな」

調子の戻った、本来の自分の声でシリムは愚痴を漏らした。

拳を握り、また開いてみる。問題なく動きはする。触覚が正常に働きたのか、体を叩き、着ていた白いロングコートをはためかせる強い風を感じることもできるようになった。吹き荒れる風が黒髪をかき乱す。

存在の構築と維持は正常となったようだが、やはり一抹の不安は拭えない。

「転移装置の不備か」

「急ぎの仕事だった。ちゃんと機能しただけ……」

背後からの機械音に、振り返る。構築の最中らしく、存在が乱れて四肢を激しいノイズに波打たせる女性の魔法士が、こちらを見つめている。転移の影響で場が不安定になり、空間が融解したかのように蜃気楼を引き起こしていた。

「技師たちはよくやったさ」

「お前が先か、ネル」

ノイズが消えれば、彼女がシリムと同じ白のロングコート——彼らの所属する組織の制服だった——を着ていることがわかった。最精鋭である『無色』の中では非常に珍しい、女の魔法士。

「破壊された転移装置を、わずか一ヶ月で修復したんだ。少々の不

備には目をつぶってやれ」

存在維持が落ち着いたのだろう。ネルは、肉声でそう話す。

「かといって、存在維持の支障は看過できんな。離肉した俺たちにとって、これは死活問題だ」

「それはそうだが、処理速度が遅れているだけのよう感じる。支障はないだろう。……他の二人は？」

「転移に手間取っているのか、座標照準がずれているか。もしくは奴らが正確で、俺たちが照準から外れた場所で構築されたのか」

「……まあ、こんな場所に放り出されればな」

ネルは呆れて、足元を見る。足元といって、そこに地面があるわけではない。舗装されたコンクリートがあるわけでも、緑の雑草が生えているわけでもない。彼女とシリムの足元には、なにもなかった。強いて言えば、白い綿雲がある。

「雲の上か。確かに、狙ってここに送り出したわけでもなさそうだな。当初の目的地から大きく外れてなければいいが」

「なによりも、まずは合流だ。ネル、探査をかけて二人の存在を確認できるか……」

彼が言い終わるよりも早く、変化が起きていた。

シリムのすぐ隣で、球体の魔方陣が二つ、虫の羽音のように耳障りな機械音をあげながら発生する。白い光によって描かれた立体式が虚空から誕生、膨張し、シリムの身長ほどの直径に達すると、今度は中心に向かって高速で収束。立体式がピンポン玉程度にまで縮む。

ネルは二つの魔法式を観察し、言う。

「……二人の探査は必要ないようだな」

「ああ。だが、探査の準備はしておけ。どのみち必要になる」

「範囲は？」

「半径五十キロから始めろ。それ以上は精度が極端に落ちる」

「わかった。楽な広さではないのだがな」

ネルの返事を聞き、シリムは注意を転移中の二人に戻した。

小さな灯り火となった二つの立体式の周囲にある空間が、ノイズに揺らいだ。やがてノイズは人の姿を形作ってゆき、存在が確定に近づくにしたがって、次第と輪郭を明瞭にする。

ノイズとはつまり存在の乱れであり、その維持になんらかの支障、もしくは存在の構築中に発生する現象だった。そのプロセス上、転移時にもノイズは発生する。

分解、転送、構築。端的に言えば、これが転移の仕組みだった。分解の段階、そして構築の段階で、必ずノイズが入る。

自分が転移した時にも気になったが、こうして見ているとやはり構築に時間がかかりすぎているように思える。が、速度を除く全体の進行そのものになんら変わった点は見受けられず、ネルの言うとおり問題はなさそうだった。

(とはいえ、あまり時間をかけすぎるのはよくないのだがな。特に、こいつはそれで騒ぐ)

ノイズが消え、二人の魔法士が顕現する。両者共に白いロングコート姿だが、身長差が大きい。というよりも、片方がやたらとでかいのだが。

二人のうち標準的な身長の方が、予想通り大声で騒ぐ。

「くっそ、やっぱり頭が痛くなる！ 転移は何度やっても慣れねえ！

しかもいつもより長いし！」

「どこか不具合があるか、ギル？」

「いつもどおりだ。頭痛がする」

「そのようだな」

転移終了後からうるさく騒ぐ、スキンヘッドの魔法士から目を離す。彼は転移のたびにこうなので、頭痛とやらを一々不都合に数える必要はないだろう。

次にシリムは、ギルとは対照的に無言でたたずむ、大柄の魔法士に視線を向けた。髪をオールバックにした魔法士はいつもの無表情で、頭を抱えるギルを見下ろしている。

「コーダ、お前はどうか？」

「構築に時間がかかったのが気になった。体に異常はない」

「そうか。ネル、準備はできたな」

「今、私たち四人を探索対象から外しているところだ。……よし、いいぞ」

答えるネルは、掌の上に球体の立体魔法式を展開。自転する白い発光体の外周を、もやのような膜が覆った。膜は立体式を覆い尽くすと淡く輝きだし、段々と光量を増してゆく。

そして、膜が弾けた。

光が四方に散り、半径五十km内にあるシリムらを除外する彼らの同類、またはその痕跡を探す。

「私の魔法は完璧だと思う。転移照準が見当違いの場所に定められていない限り、なんらかの反応があるはずだ」

「ああ。奴が存在した痕跡でも見つければ、俺たちの転移照準が見当違いでないことの確信くらいはできる。探索はそれからだ」

うなづき、探查の光が降り注いだ下界にシリムは目を向けた。そこには町があり、住居や店舗といった建物があり、道路には車が走り、多くの人々が暮らしている。当たり前のような平和がそこにある。

かつての故郷を連想させる光景に既知感すら覚えるが、ここが異星であることは肝に銘じている。このような世界にあって、肉体を棄て去る『離肉』により生物の定義からも外れた者——無色の魔法士が誕生するはずがない。

(……ちいっ)

内心で、舌打つ。

あまりにも故郷に似すぎた場所は、過去の記憶を呼び起こす。シリムたちを拒否した故郷を。もう戻らない過去を。失った平穏を。

(だからなのか?)

訊ねる。その問いに答えるべき人間は、ここにはいない。が、この星にいることだけは確かだった。その裏切り者の名を囁き、シリムは答えのない問いを繰り返す。

（だから、あなたはここに来たのか、レアリア？）

エレベータに乗り込み、十二階まである行き先から八階を選ぶ。もう何度も通った廊下を歩き、迷うことなく二番目の角を左に曲がる。十の扉から一つを選び、ノックもせずにそれを開く。

週に二度のこの習慣は、もう一年以上続けている。ありがたいかもしれないのだが、おかげで体がこの部屋までの道のりを覚えてしまった。無意識に足が動き、手が動き、気づけばもう部屋の前にいる。

最初は確か、挨拶をしてから部屋に入っていた。それをしなくなったのは、そのたびに期待してしまう自分がいたからだ。今日こそは、返事が返ってくるのではないか。期待の数だけ、落胆したが。

「……………」

辻本コウヘイは挨拶もせず、無言でそのベッドの隣の椅子に腰掛ける。

静かに眠る母の顔は、三日前見た時となんの違いもない。先週どころか、一年前からなにも違いがないように見える。実際はそんなことはないのだろう。出張が重なり多忙なため、なかなか見舞いに来られない――しかしその多忙な中でも時間を作り、どうにか月に一度か二度は病院に訪れる父は、母が少し老けたと言う。コウヘイには、よくわからなかったが。

「……………」

なにを話すでもなく、なにをするでもなく、コウヘイは黙ってしばしの時間を過ごした。病室には時計がなく、またコウヘイも腕時計などしていない。携帯電話はどうせ病院内では使えないので、家に置いてきた。家と病院の距離は、歩いて十分ほどだったので、なくて困ることはない。

だいたいの中で、五分ほどはただらうと見当をつける。

「……じゃあ、母さん」

そう言って、椅子から立ち上がる。

部屋を出るときの挨拶だけは、何故かまだ続けている。

今日は日曜だった。次の見舞いは、水曜日になる。もしかしたら、父と見舞いに来ることになるかもしれない。そのときは、花くらい持って来よう。

引き戸になっている扉に手をかけ、それをスライドさせる。

「あれ？」

入室の際には難なく動いた扉が、どういうわけか開こうとしない。更に何度か力を込めてみるが、どう引いても固い手応えが返ってくるだけだった。鍵が掛かっているようだ。

「つたく。なんだよ」

溜息混じりにつぶやく。

少し気が引けるが、仕方がない。ナースコールで助けを呼ぶしかないだろう。扉に掛かった手を話す。備え付けられているナースコールのボタンを求め、母のベッドへ歩み寄ろうと振り返る。そして「え？」

ベッドの横。数秒前までコウヘイが座っていた椅子に、見たことのない女性が腰を下ろしている。白い服を着ているが、明らかに白衣ではない。仮に医者だったとして、手品師よろしくの登場も意味不明だ。低い位置から上目遣いにコウヘイを観察するその女の仕草は、カルテに目を落としながら患者を診る医者のに似てはいたが。

女が、首をかしげた。黒く長い髪が、小さく揺れる。

何気ない一言のように、女は言った。

「あなた、お母さんを助けない？」

探査の結果は期待通りではあったが、実のところ少々意外でもあった。空振りに終わるだろうことを覚悟していたのだが、ネルの出した結果は魔力の感知成功と、大まかな検出位置特定だった。

魔力の残留場所を絞り込むため、シリムたちは地上に降り再び探

査を行うこととした。四人の中で最高を誇るネルの探査精度なら、五十キロの広範囲を探査したとしても誤差は半径二十メートル。そして二十メートルを探査させれば、精度はほぼ完璧といってよい。つまり、二度の探査で手がかりにたどり着けることになる。

ネルの探査結果を待ちながら、男三人はなにをするでもなくこの星を眺めていた。誰も口にはしないが、おそらくは三人とも、共通の感慨にふけりながら。

（こうして見ると、やはり似ている）

小さなマンションの屋上、そこにある貯水タンクの上に立ち、シリムは辺りを見回す。決して都会ではない、かといって極端な田舎でもない。情報部の資料によれば、ここはそういう町だそう。

かなり前の記憶になるが、自分の故郷もここに似ていたように思える。

（風が吹き、空には雲が流れ、日は当たり前のように巡る。子供のころは、これが自然だった。遠くに海が見える光景まで似ている）
遠目に、海の青が飛び込んでくる。これを見るのは、もう何十年ぶりになるのか。

「昔に戻ったみたいだな」

「……ああ」

タンクに背を預け、やはり景色を眺めているギルに、シリムは素直に返事をした。コードでさえ、ギルの声に頷いている。探査に集中しているネル以外の三人は、故郷の似姿に目を奪われていた。

「除外されたとはいえ、ここが移住地の候補に上ったことにも納得がいく」

「こんだけそっくりなのに、どうして候補から落ちたんだ？」

ギルが、シリムを見上げて訊ねた。

「似すぎていたからだ。皮肉なこと」

「はあ？」

「知的生命体の先住——要は、俺たちと同じ人間がいたことが最大の理由だ。この町そのものが俺たちが暮らしていた場所に驚くほど

似ているのもそのためだが、しかし人間が既に占領している土地に外から入り込もうとすれば、土地を巡ってのトラブルが必ず起きる。……そしてそれ以上に大きいのは、この星にも『淘汰』の発生する危険性があることだ」

「魔法がないのか？」

ギルの声の調子が、少し重いものを含みだした。淘汰の意味と対象、そしてその結果この星がどうなるか。彼も自分も、それを体験として学んでいる。

「魔法があるから淘汰がなされたんじゃない。人が人だったために、破滅を招いた」

「罪と罰ってやつか」

「そして業と責。因果応報。あるいは生存競争」

どこか他人事のように、ギルとシリムは互いにつぶやいた。

積もりに積もったものを借りを、先人たちの分まで合わせて返済させられた人間たちがどうなるか。それを思い知った時、人間は母なる大地に足を付けることさえ辞めなければならなくなった。そして実世界より退去した後にも、取立ての手は緩むことなく、命の贖いを強要する。

正義の味方が守るのは、人ではなく世界だった。

神が愛するのは、人ではなく世界だった。

天秤にかけられ、終に見限られた人間の行く末は、筆舌に尽くせぬほど凄惨なものだ。

「絞れたぞ」

ネルの報告に、シリムは我に返る。

「ここから北西にある小さな建物、おそらくは民家の中に、痕跡が――待て」

「どうした？」

ネルの立体魔法式の外周に、異常を訴えて文字の羅列が飛び交う。探查範囲を表した簡易地図が出現し、その一点で揺らぎを観測する。表示された測定値のグラフが、直角にすら近い急上昇を見せる。

はたから見ているだけでは詳細などわからないが、ネルの顔は明確な焦りを浮かべている。表記される情報の数々に目を走らせるたび、その焦りは濃厚になる。

「探査魔法に共鳴して、魔力が活発化している。その値はほぼ臨界加えて……」

苦虫を噛み潰した口調で、ネルは一言付け加える。
なにかを抑えるように、ゆっくりと。

「質量、零。『無色』の信号、なし。レアリアではない。彼女が持ち込んだものだ」

その言葉を聞いて――

最初に連想したのは強大な化物でもなく、無敵の怪物でもなかった。

閃く映像は、長い黒髪の魔女の微笑。

(そこまで……)

漠然と、北西の方角を睨む。膨れ上がる魔力は、既に観測機なしでもシリムの五感を震撼させる域にまで達している。危機の気配が体を突き刺す。過去に裏付けられた経験則が、生物として培われた本能が、二重の戦慄となってシリムを襲う。

「そこまでするのか、レアリア……!」

向かって北西の空間が、脅威をはらんで震える。

空間を席卷することをも許された上位種。祝福され、具象化された純粹なる力。真の霊長。

即ち、魔族。

超越者たちは、案内人を得てこの星に足を踏み入れたようだ。

マゾク

「時空封鎖をかける。ネル、敵の数はいくつだ？」

「集合休眠状態から構築と固有化の最中だが、魔力の総量から計算しておよそ六体。存在確定までの予想時間、三十秒」

「少し多いが、やれなくもないか……」

シリムは両掌を胸の前で合わせる。祈りを捧げる仕草にも似ているが、魔族に慈悲を期待するほど愚かではない。合唱した両手を、ゆっくりと離す。機械音とノイズを撒き散らしながら、複雑な魔法式の集合体が発生する。

「封鎖域は半径十キロ。それ以上戦場を広げようとするな」

伝えて、シリムは左右の掌を天に向ける。魔法式が頭上まで浮かび上がり、急速に回転を始める。様々な式がそれぞれに影響を及ぼし、歯車のように連動する。

魔法式が、爆発するように膨張。シリムの頭に降る式は彼を素通りしたように感じるが、その実、現実の空間から指定された者たち——シリムら四人、そして魔族を切り抜いてゆく。孤立した空間と時間が、彼らを飲み込む。

雲は流れず、風が消え、人の気配がなくなる。時間が止まり、指定されなかった人間は現実世界に置き去りにされた。

「簡易的な封鎖だ。魔族なら、破れないこともない」

見上げるほどに巨大なノイズが、ネルの探查結果と同じ方角から立ち上る。ノイズは分裂し、六つに細分化する。

「来るぞ」

ノイズの一つが、一際大きく波立つ。

それを視認したとき、シリムたちはマンションの屋上から飛び立っていた。

刹那。途方もない力に、鉄筋コンクリートのマンションが圧碎した。轟音が雷鳴のごとく響き渡り、大量の土砂が吹き上がる。マン

ションが建っていた場所を見下ろすと、その中心地辺りで揺らぐノイズを見つけたことができた。存在の確定と共にノイズが、白い巨木のような姿を現す。

白い巨人。その腕が、マンションに振り下ろされていた。

巨人は人の形をとってはいるが、まるでシルエツト画のような姿をしている。輪郭は間違いなく人間で、しかし目がなく、耳がなく、口がなく、顔がない。のっぺりとした裸体もあいまって、人というよりもマネキン人形のような姿をしている。

マンションを粉碎した巨人の周囲で、次々とノイズ消える。明確な姿を形どり具象化を果たした。計六体の魔族が存在を構築させ、顕現する。

それらの魔族が、ずっと手をこちらに向け――

「ちいっ」

即座に、結界を展開。それを持続させながら、弾けるように横へ飛ぶ。回避行動をとったシリムの脇を、高速で伸張された指が通り過ぎた。鞭というよりも槍に近い、魔族の指が。

敵は人間の拡大版ではない。生き物ではない動きと力で、人の天敵として生態系の頂点に君臨したものだ。魔族という、意思を持つ局地災害。

あらゆる五感と、それ以外の感覚が危機を告げる。人間としての本能が叫ぶ。人では、決して越えることができない怪物。人と魔族の戦力差は、蛙と蛇どころではない。

（人とは、な）

高度を下げて次の指から逃れ、魔法式を展開する。立体的な高度の魔法式ではない、円形の式が虚空に描かれ、それが常軌を逸して長大な剣を具象化させる。

電柱ほどの刃渡りがある大剣の柄を右手で握り、半回転するように振るう。

「ふっ！」

短く息を吐き、シリムを射抜きそこなった二本の指を断つ。直角

に折れ曲がり、背後からシリムを狙っていた最初の指が、紙細工の軽さで地へと落ちていった。

指の切れ端がノイズの中に消え去るのを確認することもせず、空いている左手を地上の魔族へと差し出す。手の先で生まれる複数の式が、一瞬後には数十振りの剣を生み出した。

一振りがシリムの身の丈程度の刃たちが、雨のように降り注ぐ。魔族たちの動きは、巨体に似合わず俊敏だった。目で追うのがやっとの機敏さで散開し、打ち合わせたかのようにそれぞれが目標へと襲い掛かる。無色の魔法士一人に、魔族が一体。ただし、シリムにのみ三体がかりで。

（最大の脅威と認識されたか）

人を搾取する側にいる魔族が、明らかにシリムを警戒している。彼らの母星を席卷し、人の領土を全てを奪いつくした魔族が、だ。自然、口元が歪む。自嘲気味につぶやく。

「光栄だよ」

発射と具象化を同時進行で行い、魔族へと刃の雨を降らせ続ける。巨体を舞わせる魔族は出鱈目な動きでそれらの多くを回避し、避けそこなった剣も傷を負わせるまでには至らない。それこそ、雨粒を弾くような感覚で。

三体の魔族の、のっぺりとした頭部に小さな亀裂が入る。限界以上を引き伸ばされたビニール袋のように、大きく裂けた口ができた。「くっ！」

指揮者のように手を振り、投剣たちの隊列を変える。

三つの口腔が、赤く輝いた。紅の光が閃き、シリムへと伸びる。防御に回した剣に触れて、光が炸裂。シリムをも飲み込んで。

盾とした刃たちが、次々と砕け散る様を目撃した。存在維持の限界を凌駕して、衝撃は強力だった。剣たちは耐えられず、砂塵となって崩れ、炎に消える。だが、それらの犠牲によって閃光の威力は格段に落ちていた。結界で防ぎきることができる程度にまで。

周囲に展開された結界に守られながら、シリムは炎と黒煙を突破

し、魔族へと突進した。

煙が晴れば、魔族の目と鼻の先にまで接近している。手にした大剣を、第二撃の閃光を放とうとしていた魔族へと投げた。投てきされた最後の刃は、一直線に魔族へと到達し、その口腔に突き刺さる。白い後頭部から、その切っ先が覗く。

銃口を塞がれば当然、暴発が起きる。口内で爆発を起こした魔族は煙を吐きながら、上体を大きく仰け反らせた。

もちろんこの程度で、魔族が死ぬことはない。だが傷は癒さなければならぬ。欠損部は再構築しなければならない。それらに力を注ぎ、そして力が尽きた時、力そのものである魔族は存在すらできない。

魔族に突き刺さった剣の柄を掴み、それを引き抜くことはせず、そのまま滑らせる。口腔から頭頂へと刃を走らせ、頭部を割る。

ゆっくりと、魔族は頭から地上へと落ちていった。再構築に力を注ぎすぎて、飛行を続けられなくなったのだ。致命は不可能でも、相当の時間を稼げたと考えていい。

追撃すれば、殺せるが。

狩人は自分ではない。一对二の身では、まだ力関係を逆転しきれない。不利な状況は打開できていない。今も、狙われている。

(上か)

かなり機敏に動き出したつもりだったが、それはほんの目の前、頭一つ分ほどの距離を通り過ぎた。白い影が槍の鋭さで上方から降りてきて、シリムの結界を薄紙を破る容易さで突破する。

その指の槍を消し飛ばして、赤い閃光が見舞われた。直撃こそ避けたが、余波が結界の表面を波立たせる。しかしその破壊の中心にあった白い指は、何事もなかったように再構築され、鋭さを衰えさせることすらない。

無造作に放たれる一つ一つの脅威が、シリムを絶命するに足る威力を誇っている。それらを掻い潜り、時間稼ぎの手傷を負わせなければならぬ。焦れば負けるが、時間をかければシリムが折れる。

投剣の群れを具象化し、束になって迫る指の槍を撃つ。ずたずたに引き裂かれる十指は、しばし硬直するもすぐに癒され、それぞれが異なる軌道を描きつつシリムを狙う。

しかしそれは、攻撃を散漫にすることもあった。シリムは回避行動を捨て、指を伸張する魔族へ直進する。迂回する軌道で襲う指たちは、シリムに追いつけずに後方の空間を抉った。と、魔族は自分の指を全て切り落とし、再構築。マンションを粉碎した腕を、シリムに振り下ろす。

直進の軌道を変え、腕と、そして眼下で放たれた閃光から逃れた。シリムを外した閃光は、射線上にあった魔族の腕を、炎と煙で包む。流れ弾の着弾により、魔族の腕が消える。

腕を失い、それを再構築しようと努める魔族に肉薄するのは容易だった。

白く大きな背中に指先を触れさせ、接点を中心に魔法式を描く。光が魔族の体を駆け、幾何学的な紋様が色素のない肌に刻まれた。魔法式が完全であることをろくに確認もしないうちに、魔族から手を離す。全力で離脱。

囁く。魔族の背に張り付いた、呪いの符丁に巻き込まれない距離で。

「堕ちろ」

時間差で、魔法式が発動。

具象化された剣の数々が魔族を貫く。奇怪な昆虫、あるいはハリネズミの容貌に、魔族は化けた。

再構築の限界が存在維持を不可能にし、痙攣する魔族の巨体にノイズ現象が発生。激しさを増すノイズは魔族の存在を崩壊させ、この世から永遠に消し去った。後には、砂塵に似た残りがすが宙に舞うだけだったが、それも程なく虚空に溶ける。

（これで、あと一体か……）

劣勢の打破を確信し、最後の魔族を見下ろすが。

次なる閃光を吐き出そうと口を開く魔族の隣、開花からつぼみに

逆行するように、切り裂かれた頭部を癒しながら浮遊する魔族が並ぶ。最初に頭を割ってやった魔族が、早くも戦列に復帰したようだ。斬り方が甘かったのか、再構築に予想したほど時間をかけなかったらしい。

「やれやれ」

戦えども、戦況はいっこうに傾かない。抗えど、追い風が吹くこともない。

それでも、やることは結局一つだった。

剣を握る手に力を込める。

戦い続けなければならない。抗い続けなければならない。

「ふふふっ」

屈託のない顔で、女は笑う。

口元に手を当てて、申し訳なさそうに笑いを堪えようと苦心しているようだが、なにが可笑しいのかその笑いはなかなか止まらない。「ごめんなさいね。急にこんなこと言われて、戸惑うのも無理ないわ」

「はあ」

同意とも疑問符とも受け止められる口調で、コウヘイはとりあえずの返事をしておく。

「今こんなことを言われて、すぐに信じられるはずがないわ。でもそれじゃ駄目なの、それじゃあ、お母さんは助けられない」

女は、母の寝顔を見下ろしながら言う。

「医者の方……ですか？」

「いいえ。私に人を治すことなんてできないわ」

困惑が、更に深さを増した。

医者ではないだろうと思ってはいたが、それにしても支離滅裂だ。母を助けると言い、しかし自分にはそれが不可能だと言う。

（頭が、おかしいのか？）

この病院に、精神の病氣にかかった入院患者はいなかったと思うが。

しかしそれでも、ここは病院だ。病魔の影に怯えるあまり、精神科の医者が必要とするような人間もいるのかもしれない。女は健康体に見えたが、外見からはわからない病氣だっていくらでもある。むしろ、見ただけでわかるような病氣のほうが少ない。

自然と、体が身構えた。まさか異常者と母を同じ病室に残して逃げることはできない。というよりも、ドアが閉まっている以上、逃げるという選択肢は最初からなかった。

視線で、ナースコールのボタンを探す。

場合によっては争ってでも、ナースコールを手にしなければ。

「そんなに身構える必要はないわ。今日はもう帰るから。ただ……」
女は、口元から手を退ける。

と、その手で虚空を叩いた。指先で、軽く触れるように。

「これだけは覚えておいて。あなたのお母さんを救う方法を、私は知ってるわ」

女の指が叩いた空間に、小さなひびが入る。

目の錯覚かと考えたが、ひびは広がり、ついには部分的に割れた。空間の欠片は細かい粉末になり、目には見えなくなる。

「なんだよ……これ……」

「また、会いに来るわ。できれば良い返事を聞かせてもらいたいんだけど」

「っ！」

世界が軋んだ。ひびが部屋一杯にまで成長し、そして、碎ける。

咄嗟に、両手で顔を庇った。ガラス細工が割れる音を聞く。ガラスの破片の鋭い気配が、体を突き刺す痛みを想像し――

想像に怯えたまま、数秒が経った。

「あ、れ？」

腕の間から部屋を覗けば、そこには来たときとなにも変わらない病室があった。

母はベッドの上で寝ており、そのベッドの横には空いた椅子があり、当然部屋の中はひび割れていたりしていない。白昼夢でも見たかのような心地になり、実際それを疑うが。

声が響く。

あの女の声が。

否応なしに、今の体験が幻でなかったのだと思い知らされた。

「お母さんを助けたいのなら、その方法を教えてあげるわ。あなたがお母さんを救うの」

爆裂が大剣ごと、シリムの右腕を消し飛ばした。燃え上がる炎から脱出し、高速を維持したまま垂直に高度を落とす。

雲と同じ高さにいたのだが、舗装された道路が急速に近づき、数秒で足が付く。体重というものがない体は音すらたてず、鳥の羽よりも軽く着地する。

（余裕はないが……）

敵が追いつくまでの時間を利用し、右腕の再構築を始める。魔族の指一本よりも細い腕だが、その構築にも時間をかけられなければならない。

「ふうううっ……」

長い息を吐く。意識を集中させ、肘から先が無くなった腕を修復。傷口から白光が溢れ、それが鑄型に流し込むかのように腕を造型する。ノイズの入る腕をなんとか構成し、維持が可能になると、光は薄皮を剥ぐように遊離し、その下から失う前と寸分の違いのないシリムの腕が出てきた。破れていた袖も修復され、新しい腕を包む。

まだ細いノイズはあるが、それが収まるのを待つ時間はない。

滑るように、動く。掻き消えるほどの初速に、魔族は対応できなかったようだ。わずかにシリムを外れて、赤い光が道路をなでる。閃光に遅れて、その軌道を炎が追走。アスファルトを溶かすほどの熱量が、空気を膨張させることにより爆発が起こる。

閃光は下水にも達したのか、アスファルトの表層での爆発に一拍を置いて、地下からの水蒸気爆発が念入りに町を破壊する。

（だが、それだけだ）

滑走するシリムを狙って閃光が発せられるが、空中と違って地上には幾らでも盾になる遮蔽物――建物や地形による天然の防壁がある。空と同じようにしては、決して有効な攻撃は望めない。

赤い光が地表をなでるが、爆碎したのは無人の道路と建造物だけだった。大地を揺るがし、炎の柱を築くばかりで標的を排除することができない魔族は、攻撃の手段を変えた。

二体の巨人は地上数十メートルまで降りて来て、まったく同じ動作で腕を掲げる。二十本の指が伸び、それぞれが蛇のように獲物を追う。建物の盾を貫き、あるいは回りこんで、シリムを目指す。

「はあああつ」

迫り来る二十匹の大蛇を無視し、魔法式を構築。多重補助式を展開。自身を中心に置き、周囲の地面に式を解き放つ。円形の紋様から互助を得て、左腕に二つ目の式を刻む。袖が塵となり、白い光が刺青のように地肌に描かれる。

多重の補助を受け、攻撃的な立体魔法式を構築。

「行け」

魔法式が、二体の魔族の中間点に転移する。

転移には付き物のノイズ現象に気づいた魔族が、なにかしらの対応をとるよりも早く、魔法は発動していた。具象化した刃が側面から魔族を襲い、五体に突き刺さる。魔族の浮遊状態が解かれるが、魔法に縫い付けられた状態では墜落もできず、糸で操作される操り人形のように脱力してその場に縫い付けられた。

魔族が活動を停止し、危機を感じるほど接近していた二十の槍も動きを止め、空気の抜けた風船のようにだらしなく地に伏す。

再構築がなされるまでの間とはいえ、魔族を完全に無力化できた。強大な魔族も動かなければただの的でしかないし、その静止状態も短いものではない。

渾身の魔法で一撃すれば、なすすべなく滅びる。

白い巨躯はノイズに崩れ、塵となり風化し、消滅して無に帰す。
例え、自分が手を下さなくとも。

シリムはつぶやく。

「……お前は終わったのか、コーダ」

青白い光がほとばしった。

雷鳴の重低音が身を震わせ、雷光の眩しさが網膜を焼く。

天から降り注ぐ雷が二体の魔族を焦がす。巨大な白が、自然ならざる雷の槌により消し炭の黒へと変色させられる。シリムの剣ごと、魔族は再構築をする間もなく存在を崩壊させた。ノイズ現象が発生し、それに抗う力さえない魔族は、命のみならずその存在全てを失う。

「早かったな」

「ああ」

振り返ると、自分が相手にしていた魔族を既に片付けたらしいコーダが、足音もなく着地したところだった。

表情に乏しい顔は不機嫌であるかのようなだが、ただ素顔が厳しいだけだった。その強面が、唇を開く。

「後の二人も、もう終わるようだ。が、ギルは少し無茶をしすぎている。封鎖域の端で、派手に暴れすぎだ」

「その点、ネルは流石だな。戦闘開始位置から、ほとんど動いていない。魔法といい、戦闘方法といい、双子でここまで違うとはな。

……まあ、息は合っているようだ」

ほぼ同時、魔族の存在がシリムの探查能力の網から消えた。時空封鎖をそれを展開したシリムにすら気づかれずに突破したのでもなければ、これは存在の消失を意味する。前者の可能性は、力量や技術の問題以前に、論理として不可能だが。

シリムは溜息をつき、前髪をかき上げる。肉を持っていた頃の癖だが、どうにも抜けてくれない。やはり癖なのか、吐いた言葉にも疲れのようなものが混じっていた。心労というやつなら、この体に

もあるのだろうか。

「とりあえずはどうにかなったか。俺たちの存在が、超意識に認知されていなければいいが」

「お前の時空封鎖は完璧だ。それはないだろう」

「だといいんだが……！」

「……」

波紋が広がる。

水面に小石を投じるように、封鎖域にさざ波が入る。閉じた空間に異変が生じ、不安定になったようだ。時空封鎖に落ち度があつたのではない。外部からの干渉により、封鎖が一部決壊したのだ。常時行われている自己診断により、欠損箇所は即座に発見され、修復される。そのため封鎖そのものが解除されたりする事態には発展しないが、しかし――

「こうも容易く、侵入だと!?!」

信じられず、シリムは叫ぶ。

空間封鎖は本来、外敵を阻むシエルターとして考案された技術だ。例え無色の魔法士とはいえ、個人で使える封鎖は簡易的なものでしかないが、それでも簡単に入り込めるような代物ではない。

空間地図を、シリムは掌から展開。侵入位置と、侵入者の現在位置を探る。

「侵入者は南南西から封鎖壁を突破。ギルに急速接近!」

「行くか」

「無論だ。ネルもギルのもとへ向かっている。急ぐぞ!」

隕石よろしく、炎に包まれ墜落して行く巨体を見送る。

炎の塊は魔族という可燃物の構築が解かれたことによって分散され、小さな火の子になり、やがてそれすらも消えてなくなる。線香花火のような儚さで、魔族は最期を迎える。

「時間を食っちゃったか」

見下ろす地上の戦場跡を見て、舌打ちする。破壊の爪跡が至る所に残り、火災は今もなお広がっている。戦闘中は気にしていられなかったが、脅威が去ってみれば、その惨状は胸を痛いほどに締め上げる。故郷に似ていただけに。

「これに似た景色を、前にも見たな……」

蹂躪され、焼かれた故郷。

家も、学校も、近所の公園も、多くの友人も、両親も。踏み潰されて、消えてしまったあの日。

かつて少年だった自分、そして妹にとって、全てと同義だった世界が赤く染まった日。

忘れようと努力してきたが、どうあってもこの記憶に鍵をかけることができない。あの炎を忘れることができない。だからだろう。ギルの力が、赤い炎なのは。

「あ、れ？」

思考に、ヒビが入る。

視界が歪んだ。もしや泣いたのか、と疑ったが、この体ではそれすらできないことに気づく。本当に、空間が歪んでいる。封鎖域が軋んでいる。

「これは！」

外部からの力に、封鎖空間が屈した。隔壁を突破されている。

反射的に振り返る。探査などかけずとも感じ取れるほど、近くで空間が異常をきたしていた。その異常の方向に、体を向けようとして。

「え？」

左の脇腹を、なにかがかすった。封鎖域では鳥すら飛んでいないはずだし、もしも鳥がいたとして、この高度にいられるはずがない。見れば白いロングコートごと、あばらの辺りが挟られている。ぽっかりと、穴が空いていた。結界すら張っていなかったとはいえ、これはあまりにも――

「……馬鹿、な……」

「相変わらず探査能力はお粗末ね。隙だらけよ、ギル」

背後から、聞き覚えのある声。ギルの脇を通り過ぎざま、見えもしない素早さで彼の体の一部を切り取った、女の声。

傷口からのノイズが、瞬く間に体中を寝食した。せり上がる存在の乱れは、腹から胸、そして頭部にまで至る。構築が解かれ、分解が始まっていた。

（再構築できねえ！）

崩れる体を、再構築できない。構築を解かれ、更には再構築すらできないとなると、無色の魔法士は砂の人形と同じだった。これ以上なく脆く、自身を維持することすらできない。存在が崩壊する。

叫ぶ。絶叫のつもりが、喉から漏れたのは機械音のうめきだった。声すら、満足に発せない。

「……レア……リ……ア………！」

「ええ。ギル、久しぶり。でもさよならね」

黒髪の女魔法士が、ゆっくりと右手を振る。別れの挨拶だ。おそらくは、あの手がギルの腹を裂いたのだろう。女の細腕による一撫でに、抗する術がまるでない。

ギルの体が、光に化ける。光は小さな球体になり、そして、消えた。

マジョ

剃髪した魔法士の体が光になり、球体に凝縮され、消滅する。その一連の変化を、同胞の存在が視覚からも探査能力による超知覚領域からも完全に失せるまで観測。詳細を記憶する。

「ふむ」

右腕を——無色の魔法士を一振りで退けた腕を見下ろす。悪くない。

だがもう少し、自分の能力についてデータを収集しておきたくもある。これだけでは、まだまだ情報が不足していた。他の無色と比較して、自分の優位性がどれほどのものか、自分の器というやつを理解しておきたい。場合によっては——そんなことは有り得ないだろうが——、無色の全員を相手に戦う可能性があるのだ。それまでに、自身の能力くらいは把握しておかねば。

幸いにも、情報収集の機会には不自由しない。例えば、今この時のように。

「迂闊……」

呟く。背後から迫っていた気配に向かって。

極低温の魔法が、レアリアを中心にして温度を瞬間的に氷点下にまで下げる。空気が凍え、水蒸気が氷に変化した。氷は花卉のように咲き誇り、レアリアの体を巻き込んで氷結する。

「はああああっ！」

怒号が響く。頭上から、魔力を乗せて。

圧縮された立体魔法式が、目の前に落ちてくる。魔法ともいえない純粹な魔力が爆発した。小手先の技術を省いた、直接的な力が叩きつけられる。炸裂した白光の衝撃が空域を圧した。

相手を不意打ちで行動不能に陥れ、しかる後に大魔力を叩き込む。良い戦略だ。良い戦略ではあるが——

惜しいかな。その前の段階で、彼女は既にミスを犯している。

「迂闊よ、ネル」

総身を覆っていた氷は大半が今の攻撃で吹き飛び、残った微細な霜も身震い一つで体から離れる。長い髪だけは、手ですいてやる必要があったが。

見上げることもせず、上空にいるネルへと語りかける。

「敵の戦力を計らずに、単身で挑むなんて。頭に血が上ると後先考えなくなる性格、なおしなさいって言うておいたでしょう。そういうところは、ギルとそっくりね。もっとシリムを見習いなさい」

「黙れ！」

「あら、いいの？　こんな封鎖領域の端っこで戦っても。封鎖領域を破るのに一番簡単な方法が、境界隔壁の突破なのはあなたも知ってるはずでしょう」

「黙れと言った！」

荒れ狂う魔力が、ネルの描く魔法式に集う。絶対零度級の魔法を繰り出す前兆であろうが、しかし、彼女は理解していない。彼女と自分の差は、単純な戦闘能力だけではない。頭に血の上った彼女には、それを理解しようとするだけの冷静さもない。

彼女にはそれを理解するだけの能力があるはずだが。

「残念ね」

顔を上げ、ネルを見る。本当に、残念だ。

彼女は理解できていない。

これは無色の魔法士同士の戦いではない。

これは無色の魔法士と、その天敵との戦いだ。

リアルな夢だったのではないか。

帰路を歩く中、そんなことを考える。コウヘイとしても、勿論母には元気になって欲しい。いっこうに回復しない母に、焦りのようなものを感じていたのも確かだ。物言わぬ母の誕生日を、共に祝ったときの父の顔を今でも鮮明に覚えている。

（母さんの誕生日、近いよな……）
だからなのかもしれない。

あの女はコウヘイの作り出した想像上の人物で、女の言ったことは全てコウヘイの願望なのだ。

——あなたがお母さんを救うの。

魅力的な言葉だ。

そんなことができるのなら、自分だってそうしたい。母の事故には責任を感じているし、事故のことでもなんにも言わないよう気をつかってくれている父にも申し訳ない。

だから、あんな幻を見たのだろう。

でも、もしかしたら——

「よ、コウヘイ」

正面からかけられた女の声に、びくりと反応する。

足元に落としていた目を上げてみる。が、そこにいたのは長い髪の毛などではなく、もっと若く、また短い髪の少女だった。

「サキか。なにしてんの？」

「部活の帰り。真正面から歩いてくるのに気づかないなんて、寝ぼけてんじゃない？」

ジャージ姿のサキは、呆れたようにそう言う。同じ中学に通う同級生は女子バスケット部に所属していたが、時間はまだ午前中だ。コウヘイとサキの通う中学の女子バスケット部は、廃部寸前の男子バスケット部と違って強く、その部員が日曜の午前中にうろろしているのは珍しい。

「部活はサボり？」

「午前中だけだったの。それより」

サキの視線が、コウヘイの背後に向けられる。彼女の視線を追えば、そこには先ほどまでコウヘイがいた病院があった。

「お見舞い、行って来たんだよね？」

「うん」

「もしかしておばさん、良くないの」

「違うよ。相変わらず」

はたから見れば、コウヘイの姿は落ち込んでいるようにも見えただろう。どうもまだ心配そうな目をしているサキは、コウヘイの昔からの知り合い——幼馴染だった。サキは母のことも知っており、何度か見舞いに訪れたこともある。

「しばらくお見舞いしてないな。今度、あたしも行くよ」

「次は水曜だ。部活がなかった来いよ。もしかしたら、父さんもあるかも」

「おじさん久しぶりだな。半年くらい合っていないよ」

「忙しいからね」

他愛のない話をしながら——

コウヘイは迷っていた。あの女のことを、サキに相談するかどうかを。

どう考えても突拍子のない話だ。世話焼きで心配性のサキは、多分本気で聞いてはくれるだろうが、その後本気で精神科を紹介しかねない。なんというか、彼女はそういう人間だった。

（とりあえず、黙っておくかな……）

そう結論付けて、コウヘイは女の件について口を閉ざすことにした。あまり意味はなかったが。

（何故だ！）

背を向け全力で逃走しながら、反撃の魔法を作り出す。

慣れた手順を踏み、魔法式を構築。水も漏らさぬ制御で描かれた立体式は、無駄な消費を一切せずに魔力を魔法へと昇華させ得るできだった。式の質も、魔力の量も申し分ない。

それを放つ。

振り返りつつ、魔法式を相手へと押しやる。

かわすこともしない敵に、魔法式が直撃した。開放された魔法は全ての物体を凍てつかせ、分子のレベルで動きを阻害、完全に停止

させる。生物なら体組織が壊死し、肉のない魔法士とて無事では済まず、魔族にすら有効な攻撃魔法である。その魔法が。

（何故、通じない!?）

髪の一筋さえその艶やかさを失わず、レアリアは魔法の効果範囲をすり抜ける。最初の攻撃以来——いや、最初のそれも含めて、彼女への攻撃は全てが無力化されている。

「最初の威勢はどうしたの？ 鬼ごっこは、もうごめんよ」

嘲笑するレアリアの声。それに、途方もない威圧感が添えられている。

見惚れるほど繊細で、圧倒されるほど力強い、芸術品のような魔法式が展開される。神々しくすらある白い光の球体から、黒い影が染み出た。神秘的に輝く球体からあふれ出したどす黒い闇は、意思を持っているかのように、ネルを食らおうと襲い掛かる。

（はやい!）

魔法を扱うまでのタイムロスが異常に短く、早い。また、放たれた魔法も飢えた獣がごとく、不気味なほどに速い。

直線的だった飛行の軌道を変え、はるか高みに上昇した。速度で劣っているなら、小回りでその差をうめるしかない。眼下の空間を闇が飲み込んだ、ネルはなんとかその身を捧げずにすんだ。が。

「甘い」

「っ!」

先回りされた。そう気づいたときには、もう遅かった。

音すらほとんどしなかった。先ほどまでさらされていた闇の魔法の脅威と比較すれば、呆れるほど軽い衝撃が体を貫く。背後から、胸元へと。

見る。細い腕が、彼女の胸から生えていた。指を伸ばし、一応は手刀の形をとってはいるが、刃物と呼ぶには程遠い女の手。

「素手、で……私の構築限界……を、上回った……のか……?」

「こう見えて、力には自身があるの」

冗談の口調。耳元に寄せられたレアリアの口から、そんな言葉が

発せられたと思う。聴覚がいかれ、よく聞き取れなかったが。

ギルのときと同じだ。存在の維持どころか、再構築も不可能。それどころか、ネルの体が自らを壊してさえいる。铸像管理が、自壊を命じている。ネルの存在が、自身の分解を望んでいる。この感覚を、彼女は知っていた。

（勝てない）

絶対にネルは——いや、無色の魔法士では、レアリアに勝てない。彼女と自分達の間にあるのは、猫と鼠の間にあるような、強弱の問題ですらない。生態系ピラミッドの上下ではない。

これは、もつと質の違う。

「……お前、は……」

体が崩れる。光が包み、光になり、光に消える。

すでに五感と呼べるものは失せていたが、レアリアの声は、突き刺された腕からネルへと流れ込んでくる。

「やっとわかったみたいだけど、残念ね。あなたには理解するだけの能力があった。でも、あなたは理解できなかった。だから……」

間をとる。ゆっくりと——今度こそ——ネルに理解させるために。噛み締める時間を与える。ネルの意識が暗転する直前、最後の声が頭の中に響いた。

「あなたの負けよ」

よほど切羽詰っているのか、冷静さを失っているのか、あるいはそう誘導されているのか。ネルはシリムたちを目指すどころか、むしろ離れるように戦闘を続けている。静の戦闘を得意とするネルにしては珍しい、戦場を広げる戦いかたをしていた。一方的な逃亡劇を、戦いと呼べるなら、だが。

と、シリムの探査能力が、ネルの存在を知覚できなくなる。

宙空で静止。全速力から唐突の急停止に、対応できなかったコーダがシリムを追い越してから停止する。

「ネルの存在が消えた!」

「……そのようだ」

「しかし、これは……」

なにかが妙だった。無色の二人をことごとく、短時間でほふり去ったレアリアの力量もそうだが、それだけでない奇妙な感覚がシリムの中に芽生えている。なんというか、既知感に似た。

胸の中に、靄のように曖昧な不快さが居座る。

「……………」

「シリム？」

「このまま戦って、レアリアに勝てる見込みは少ない。はっきり言って、勝率は万に一つもない」

ネルほど卓抜した探查能力があるわけではなかったが、それでも彼我の戦力差を見極めることはできた。シリムとコーダが二人がかりでも、レアリアは歯牙にもかけず彼らを一蹴するだろう。ギルとネルの兄妹がそうだったように。

レアリア——『最初の無色』は、その異名に恥じぬだけの強さを誇る魔法士ではあった。だが、それにしてもこれは強過ぎる。一月前とは次元の違う強さを振るっている。そこには不自然があった。(もしかしたら)

不自然な強さ、不自然な振る舞い、不自然な感覚。それらが、シリムの中で一つに繋がった気がした。裏付ける証拠などないもない、憶測でしかなかったが。

「コーダ。俺に一つ策がある。仮説に基づいた、出来損ないの策だが、お前の命を預けてくれないか？」

都合の良い頼みであることは百も承知だ。それを押して、シリムは訊ねた。

鑄型を失い、型をとれなくなった存在が、白い発光体となる。

白光に導かれて、二人目の友人が旅立った。彼らの行った道が――

―資格を持つ者のみが歩むことのできる旅路が、しかし快適な道のりでないことは知っている。だがその旅路に、後二人の友人を送り出さねばならない。自身を知るための練習台として。

（酷い女よね。我ながら）

くすりと、笑う。

自らを嘲笑うほど自虐的ではないつもりだったが。

「さて。殿方をお待たせするのもなんだし、ご足労させるのも悪いし……ん？」

接近してくる、大きな魔力がある。あるにはあるが、これは。

「一つ？」

左手から探査の魔法式を展開。封鎖域内の縮図が発現する。ドーム状の空間内部に、三つの光――三人の魔法士の反応を確認できた。一つは自分、そして自分に向かってくる魔法士が一つ、最後に、ドームの側壁辺りに一つ。その最後の一つの反応が、ふと消えた。

「……逃げた？」

その言葉を合図に――いや、一人が逃げたのを合図にしてだろう。大量の魔力を練りこんだ、大出力の魔法。閉じた空間を明るく照らす雷光。水平に降る雷が、レアリアを避けて通り過ぎた。

「一人で来るとは思ってたわ」

「……本当に、当たらないんだな」

こちらの言葉を見無視して、ぼそりと独り言を呟く。

長身で、髪をオールバックにした魔法士。彼とまともな会話というものをした記憶が、ほとんどない。事務的な会話ならともかく、他愛もないおしゃべりを望める相手ではなかった。

「シリムを逃がして、自分は私の足止め？」

「そんなところだ」

「嘘ね」

即座に断言する。シリムの性格は、自分が一番わかっている。

「彼が逃げるはずないわね。どこに向かったの」

「その口調では、もう気づいているようだが」

コーダは惚けるでもなく、そう肯定する。

「ふふふっ。やっぱり良いわ、彼。かなり高い点数をつけてたつもりだけど、それでもまだ見損なっていたみたい。私の力を見破ったのも、シリムなんでしょ？　そうでなきゃ、あなた一人を残して行くはずがないものね」

「その通りだ。安心した。奴の仮説は正しいらしい」

言うほど、その表情に安堵はうかがえない。鉄壁のポーカーフェイスにより、心のうちを無表情の下に隠しているのか、あるいは、最初からシリムを信じ切っていたのか。

「つまりお前は、私たちの映像管理に外部から干渉する手段をみつけたわけか。『箱庭』の技師や、大賢者たちが聞いたら卒倒しかねない話だが、考えてみれば貴様は自身の映像管理を解除することに成功していたな。まさか他人のそれにまで影響を与えられるとは、想定していなかったが」

「影響といって、それほど大層なことができるわけじゃないわ。存在の確定が曖昧な私は、私の発する信号——いつもは無色の信号で安定させてあるけど、それを短い時間だけなら変更できるのよ。例えば、あなたたちの禁忌コードに抵触するような、ね」

「私たちの超感覚が、貴様を不可攻撃目標——箱庭の主要建造物あるいは大賢者たちと誤認し、攻撃をキャンセルしたのか」

短い時間とは、つまりほんの数秒程度のわずかな間だった。しかしそれだけあれば、他の魔法士が繰り出す全ての魔法を無力にできる。必殺の大魔法を、派手なだけの虚像に変えてしまうことができる。

「無色の魔法士——箱庭の守護者である私たちを、最も恐れたのは誰だと思う？」

「魔族でないのは確かだな」

「ええ。魔族に恐怖なんて感情はないでしょうね。では逆に、恐怖を感じるのはなに？　地位や名誉なんてつまらないものに囚われて、一々悩みごとを増やす存在は？　当然、人間よ」

身振り手振りを加えて、彼女は語った。

侮蔑を含んで続ける。

「箱庭なんて明日も知れない場所で地位にすがりつき、名誉の椅子から蹴落とされるのを恐れているのは、あの生命維持装置に繋がれてなければ息もできない老人たちだけよ。彼らは大賢者の名を脅かす最たる者として、無色の魔法士を警戒していた。無色の魔法士たちが必要不可欠なのは事実、かといって鎖でつないで番犬であることを強制しなければ、いつ自分たちの居場所を奪われるかわからない。だからこそ、鑄像管理に禁忌コードなる鎖を組み込んだのよ」

本来ならば棺桶に収められるべき体を、様々な機械と投薬、数十回の手術と魔法的肉体治癒・復元により、現在に至るまで使い古している妖怪たち。肉のない自分が言うのもなんだが、残ったオリジナルが体の四割に満たないあの老人たちは、最早生き物ではない。

「不可攻撃目標、普遍主従、大賢者長に至っては存在破棄命令というこの世で最も具体的な死刑宣告までも可能——まあ前例はないけど。これらの絶対上位権限で無色を隷属させることで、老人たちはなんとか安心していた。だけど、私はそれを逆手に取った。もちろん、絶対上位権限を完全に行使できるわけではないわ」

「わずかな時間の不可攻撃目標化。こと無色に対して、最強の盾を得たわけだ。そして、二人を消したお前の持つ最強の矛は、普遍主従によっての」

「帰還システムの強制起動」

言葉の半分を受け持つ。

「ギルも、ネルも。びっくりしたでしょうね。構成維持ができずに体が分解されて、再構築も働かない。でも当たり前のことなのよ。転移はその工程の中で、存在を分解しないといけない。エラーの発生を防止するため、転移中には魔法士の意味で存在を構築も維持もできないようになってるし。でもまあ、拍子抜けもしたでしょう。死んだと思った次の瞬間、自分の家の玄関先に転がっているわけだから」

「だが、それを実行するには相手に接触していなければならない。違うか？」

「そおね。探查能力の裏を付いてどうにかなる問題じゃないから、必ず手を触れさせて命令を送らなければならない」

「距離を取って戦えばいいのだな」

「そういうことね。……あなたとこんなに長い時間しゃべったことがなかったから、もう少しコミュニケーションをとっていたい気もあるけど、この後にも予約があるの。そろそろ、時間稼ぎに付き合っていられなくなってきたわ」

軽い言葉とは程遠い緊迫感に、空気がささくれ立つ。痛いほど鋭く尖った気配が肉のない体を刺激する。風のない世界をざわめかせる。

心地良い緊張感を味わいつつ、呟く。

「私、待つのも待たせるのもキライなの」

封鎖空間からの脱出は、正規の手順であればスムーズなものだった。偽りの空間にいる権利を破棄すれば良い。それだけでシリムという存在が、現実の世界と時間に吐き出される。

復活した時間を実感させたのは、やはりここに来たときと同じく風だった。最初の転移時よりもいくらか高度は低いが、それなりに風は強い。その風をコートにはらみながら、彼は目的の場所を探した。時空封鎖を展開した地点からだいぶ離れてしまっていたが。

（あそこか……）

最後に見たとき、たしかに破壊されていたそれ——シリムたちがこの星で足を下ろした、唯一の建造物。マンションとしては小さく、しかし町を望むことができた場所。その北西辺りに、あるはずだった。

ネルの探查に引っ掛かった、民家と思しき建築物。

（あれで間違いないか）

二階建ての民家に目星をつける。注視すれば、わずかに立ち上る魔力の残滓を確認できた。気にすることは無いと思うが、なんらかの罠に気をつけておいたほうが良いだろう。

右目の前に式を描き、それ越しに目的の家を眺める。左右の目で、別々の景色を見た。左の目に映るのは、遠目に見るなんの変哲もない家屋であったが、右の目に映るのはそれを倍率の調整により拡大させ、探査による詳細な情報を表示させたものだった。

（魔力があるが、罠をはれるほどの量ではない。場に溜まった残留反応だ。大きな生命反応もない。人が――おそらく一人で住んでいるようだが、今は留守か。レアリアの情報を聞き出したかったが……）

家主を待っている時間はない。コーダの時間稼ぎも、そう長続きはしないはずだ。それまでに、次に繋がるなにかを得なければならぬ。体を舞わせ、目的の家へと降下する。

レアリアに、殺害の意思がないこと――彼女がシリムらを送り返す以上のことをしないと見抜いたとき、シリムは自分が選ぶことのできる最良の行動がなんであるかを考えた。戦って死ぬことはないが、どうあっても勝てるはずがない。戦って、負けて、送り返される。悔しいが、これがシリムの行く末だろう。

だがしかし。死なないということは、次があるということだ。戦いの時を先延ばしにし、その間になにか有益な情報を得る。それができれば、今回の遠征は、目的を果たせなくともまったくの無駄足にもならない。

家の屋上に着地し、そのまま足元から沈む。顔が沈む際に瞬間視界が閉ざされるが、完全に通り抜けるとそれも復活する。屋上を通過し、二階の床に足を下ろした。

なにか――なんでもいい――次に繋がる手がかりさえ得られれば。

「ふんっ」

アスファルトの地面に掌を打ち下ろし、魔法式を焼き付ける。完成した魔法式は即座に力を発揮し、地表に雷撃を走らせ、そして破壊した。アスファルトの残骸が吹き上がり、煙幕となってコーダの姿を隠す。

相手から姿を隠しつつ、魔法で空けた穴から地下へ移動。下水道を通り、いったん距離をとる。とるはずだった。

ほんの少し進んだだけで、動きを止める。

「……っ」

地下のそれよりなお暗い影が、コーダを待ち構えていたように現れる。彼女はコーダの逃走経路を読み、魔法式を放っていたのだろう。化かし合いでは、自分に分が悪いようだ。

（わかっていたことだが）

頭の回転の速さで、自分がレアリアに勝てないのは重々承知だ。彼女の聡明さは、箱庭の技師どころか学者をも凌駕している点があった。

頭上にある地表を、体を透過して抜ける。半ば予想していたことだが、やはりそこにも彼を待ち受けているものがある。漆黒の闇が、上空から降ってきた。出力を最大にした結界で受け止めるが、信じられないほど多量の水を被ったような錯覚に陥る。必死に、その重さに耐える。

「ぐうっ」

「がんばるわね、でも」

悪寒が、首筋を泡立てる。囁かれた声は、結界さえなければ息が届くほどの間近からのものだった。即ち、背後から。

敵の姿を視界に入れようと首を捻り、コーダが見たのは、レアリアがノックをするように結界を小突く様子だった。たったそれだけの動作に、彼の心臓が――実際にはそんなものとうに捨てているのだが――跳ね上がる。レアリアに接触した地点から砂が風に飛ばされるように、結界が解除されてゆく。

（再度の展開……）

試みるが、そんなものが間に合うはずもない。

結果がなくなれば、それが防いでいた魔法は当然、コード自身が受けることになる。

闇を頭から被り、空から落とされて地面に押し潰される。大した抵抗もなく、コードを飲み込んだ魔法は地面を貫通して地下にまで達する。今しがた逃げてきた道を逆戻りするようにして、下水道へと叩き伏せられた。

「がっ……」

レアリアの魔法が、コードの体を縛る。巻きつくような影が、四肢を覆った。

「少しだけ、手間取ったわ。ほめてあげる」

地上から、そんな声が聞こえた。

闇の魔法に束縛されたまま、コードは地下から引き上げられる。

巨大な腕に握られ、持ち上げられるような、そんな感覚だった。人形などの玩具にされた気分で、あまり気持ちの良いものではない。

「ここまでか」

「あなたはよくやったわ。シリムは良い部下を持ったわね」

「無茶なだけだ。隊長があれだからな」

「あなたのほうがシリムより少し年長だったと思うけど、年下の上司のためによくやるわ」

ふっと――自分にしては、非常に珍しいことだが――笑う。見栄や虚栄など、離肉して亡霊も同じの自分たちにあるはずがない。

「肉のない私たちに、肉体年齢は最早関係ないだろう。貴様も、もう七十近いのだろう？」

「なにを言うのかしらね。私は外見も中身も、永遠に二十歳よ」

その返事は冗談とも本気とも取れたが、レアリアの容姿は確かに二十代に見えはした。当たり前だ。二十代の時に離肉した彼女は、時間による老化から開放され、当時のまま変わることはない。

外見に関しては、だが。

彼女から受ける印象は、二十歳の小娘ではなく、もっと経験を経

た女性のそれだった。

「私は、早く生まれたかどうか——そして大賢者たちが命じたかどうかで、自分が信じる者を決めたりはしない。シリムの頼みだったから、命を懸けた。それだけだ。最後に残ったのが私でなく、ギルだろうと、ネルだろうと、同じことをしたさ」

「そう」

レアリアの手が、拘束されたコードの肩に置かれる。置かれた手はスポンジに沈むように、コードの体に埋没する。彼の存在維持を解除し、分解する。レアリアが手を離れたときには、コードの肩口が削り取られていた。

「シリムは幸せ者ね。羨ましいくらいだわ」

「なにを……言うか……」

声音が変じ、レアリアが聞き取れたか不安だったが。

コードは首を振って、言う。彼女はわかっていない。本当に羨ましく思うのは、彼女ではなく、自分たちのほうだ。

「……私たちの、シリムに対する……念は、シリムが貴様に向ける念と似たものだ……ネルに至っては、同じと言ってもいい」

コードの存在が、ノイズに大きく乱れる。四肢は崩れ、五体は散じ、全ての感覚が失われる。視力が著しく低下して遂には失明する刹那、レアリアの口が動く。聴覚は既になく、また超感覚も完全に死んだ無音の中で、コードは彼女の口を読む。

緊急帰還のプログラムに身をゆだねる。分解が済む直前から、再構築されるまでの間意識を閉じなければならぬが、それについて不平を漏らすのはギルくらいのもものだ。なにも、問題はない。

レアリアの答えに満足し、コードは母星へと転移した。

「ちいっ」

探査魔法をかけてみても、これといって興味を引くような結果は出ない。残留した魔力の痕跡がわずかに検出され、レアリアがここ

に来てご丁寧な魔族の罠を仕掛けて行ったことくらいはわかるが、その他に、自分たちにとって有益な情報を発見できない。

（レアリアはこの家を、魔族を配置してまで守りたがった。封鎖空間に集団休眠状態の魔族を内封し、無色の魔力に反応して隔壁が破れるように細工していた。言うほど簡単なことじゃない。時空封鎖の維持にも、万一にも魔族が暴走しないための封印にも、特殊な隔壁にも。かなりの魔力を消費するはずだ）

この家に――なんの変哲もないこの家に、それほどの労力を注ぐには、なにか理由がある。ただの罠ならば、もっと別の方法を考えるはずだった。

「……なにかないのか……！」

苛立たしく、呻く。もう一度探査を行おうと、魔法式を構築して。シリムの耳に、金属の軋む音が届いた。レアリアがコードを突破したのかとも考え、身構えるが。

（いや……）

聞こえる声と、足音があった。先の音は、門の開く音だ。声と足音は、誰か――おそらく二人――が話しながら、家へと近づく音だった。声は幼いが、家の住人の可能性がある。

一筋の光明を掴んだ。

急ぎ、玄関へと向かう。音もなく廊下を滑り、扉を開くこともせず潜り抜ける。地面に直角に立つ水面を通過するような感覚で、シリムは外へと出た。

目に飛び込んできたのは、訳もわからずこちらを見上げる二人の男女だった。声もそうだったように、二人とも幼い子供で、おそらく十四、五の年齢だろう。

怯えるでもなく、驚くでもなく。

彼らは今、自分の目に映る光景を理解しようと努めているようだった。

シリムはその二人の片方――少年から、染み付いた魔力の残り香を感じ取った。

カイコウ

転移装置。

実のところ、その機械を指してそう呼ぶのは適切ではなかった。

あれはあくまで真の転移装置を作る上で発明された試作品の一つを改良し、実用に耐え得る性能を与えた程度の、いわば出来の良い副産物にすぎないからだ。

元々は大威力の魔法を遠く離れた地へと瞬時に送り込む、大陸間戦略兵器の技術を応用したそれは、魔法現象と化した無色の魔法士を他の惑星へと転送することができた。人の生存を許容することができる新天地へと運ぶことが可能だった。素晴らしい技術と賛辞を述べたいところだが、転送することができたのは無色の魔法士だけだった。

無色の魔法士を転移させたことに成功したのは、もう三十余年も前のことだ。その成功により人は滅びの大地から解き放たれ、第二の故郷となる星へ移住するという希望を持つ。当時、この『箱舟』に彼らが立てこもって既に十数年の時が経過しており、絶望していた彼らにとって、転移の成功は眩し過ぎる光だった。あまりに眩しくその本質を直視することもできず、それなのにただ浮かれていた。自分を含めた皆が。

すぐに、次なる故郷の選別は行われた。母星と良く似た惑星を探し、そしていくつかの候補地を選び出した。夢を馳せて行われたそれは、まるで新居のカタログを広げる心地だった。その当時は。

今にしてみれば、それはあまりにも――

（虚しいものだ。思い出してみれば）

閉じていた目を開く。見えたのは、薄暗い部屋の汚い天井だった。固いベッドの上、しばし虚空を見つめる。

よくよく考えれば、それは当たり前のことだった。魔法を転送するだけの装置が、質量物を――例えば生身の人間を、他の惑星へと

連れ出すはずがなかった。転移装置の開発が行き詰るのに、それ程の時間は必要なかった。眩しかった希望は時間と共に急速にその光を弱め、もはやその名残すらこの牢獄にはない。

『箱舟』の呼び名も希望と同じく廃れ、現在では『箱庭』という呼び名に取って代わられている。

（淘汰の日から五十年。かつての平和を知らない世代が増えた。おかげで箱庭内の治安は最低だ）

上半身を起こす。外を知る数少ない世代の彼は、もう六十になる。頭髮は白くなり、見下ろす手も皺だらけになっている。右腕だけは、だが。

「……痛みやがるな、今日は」

左腕に、右の手を乗せる。金属の冷たい感覚。それを握り締め、激痛を堪える。

彼の左腕は、金属製の義手だった。二十代の頃、箱庭内で勃発したもののとしては最大の内乱に巻き込まれ、肘から先を失っていた。新たな腕を獲得してなお、かつての腕の痛みは癒えてくれない。幻肢痛というやつだ。個人差により半年で消える者もいるそうだが、どういうわけか彼の場合、今になっても一カ月に一度の頻度でこの痺れるような痛みが襲ってくる。

加えて薬の効きづらい体質のため、この痛みをやわらげる術がない。

「眠れやしねえ。あの出来損ないの修理に、ここ一月まともに寝てないってのに」

愚痴をこぼすが。

どうやら、この痛みの有無とは関係なく、彼に安息は与えられなかったようだ。

「！ くそ、こんな時にっ！」

けたたましい音で、サイレンが鳴り響く。

敵襲を知らせる大音響は箱庭全体を駆け、住民達にシェルターへの移動を命じている。だが、技師である彼にとってのサイレンの意

味は、少々他の者たちとは違っていた。彼にとってのサイレンは、箱庭の生命線であり様々な主要建造物が集中する中央への召還状態だった。万が一の場合、すぐさま修理に取り掛かれるように。

「レアリアもシリムもいねえ。これでどうするってんだ、畜生」

怒鳴り、腕を抱えながらベッドから立ち上がる。その時だった。爆発が、彼の住居を破壊した。衝撃に家は崩れ、見上げていた天井が頭上から降ってくる。部屋の端まで吹き飛ばされながらも、本能的に頭を庇うことはできた。こんな腕でも、こういう時には頼りになる。土石流となって、家屋の一部が彼の体を叩いたが、なんとか致命傷は防いだ。

薄れる意識の中、しかし自分がまだ死んでいないことくらいはわかる。

それは信じられないことだった。箱庭のこの深度まで、侵入を許すとわ。

かつては天井だった物の残骸に埋もれながら、その隙間から彼は見た。爆発が起こった方向に、それはたたずんでいた。捕獲された実験体を別にすれば、それをこの目で見るのは五十年ぶりになる。

現在、この星を支配する白い巨人。

それが、下層のとはいえ住民たちが居住するこの区画にまで侵入している。

「……や、べえ……」

額から伝った血が、視界を閉ざした。もう痛みを訴えるのは失った左腕だけではなくっている。

多重の激痛の中、彼の意識はとうとう消えた。

「一人暮らしか。いいなあ。あたしもこんな広い家を自分だけの物にしてみたいよ」

二階建ての一戸建てを見上げ、ちゃんと両親と暮らしているサキはそんなことを言う。中学生が一人で暮らすことはなにも楽なこと

ではなかったが、彼女にとってはそれが憧れらしい。

父親の仕事が忙しく、あまり家に——というか町に帰ってこない
ので、コウヘイは中学二年生の若さで実質上の一人暮らしをしていた。

「サキじゃ無理だよ。掃除とか洗濯とか、家事は全部自分でするんだから」

「それ、どういう意味よ？」

「楽じゃないってことだよ。家が広いと掃除にはその分、手間が掛かるんだから」

「掃除くらい、あたしもするよ」

「部屋の掃除だろ」

言うほどちゃんと、家事をこなしているとは言いがたかったが。

家の門を開き、その敷地内に足を踏み入れる。偉そうに言った割りに玄関先の掃除がされていなかったが、サキはそのことに気づいていないようだった。ほっとする。

「じゃあ、月曜日に」

月曜日に学校で。そう言おうとして、コウヘイの口が動きを止めた。止められた。

その現象をどう形容して良いのかわからなかったが、見たままを言う——家のドアから人が生えてきた。

顔、首、胸、腹、腰、足。順にドアの中から出てきて、最後にはコートを着た一人の男が、コウヘイの前に立っている。病室の女と同じ、白くて長いコートだ。

目の前での唐突のイリュージョンを、たつぷりと十秒ほどをかけて理解したときには、コウヘイは自分の頭がイカれたことを確信した。

「俺の言葉がわかるか？」

男が、なにかを言っている。

この短時間に、二度目の怪奇現象の目撃——つまりは幻覚症状の発症。加えて幻が語る幻聴までも。入院は確定だ。

諦めと、ほんの少しの安心感を味わっている中、後ろから妙な声が聞こえた。

「……え？」

肩越しに振り返る。そこにはまだサキがいて、ぽかんと口を開けて、コートの男を凝視している。

彼女には、この男が見えている。

頭を殴られたような気分になった。

「お前は、俺が言っていることがわかるか？」

向き直る。頭一つ分以上も高い男の目が、コウヘイを見下ろしている。

「あ、俺……？」

「聞こえていると判断する。語訳は正常なようだ」

男は一人得心して、首を縦に振る。

コウヘイとサキが二人して同じ幻を見ているのでない限り、この男は——考えにくいのだが——実在しているらしい。

「お前に訊ねたい。俺と同じ、白いコートを着た人間を知っているか？」

「白いコート……？」

心当たりは、勿論あった。

それは、ほんの数分前のことだ。印象深すぎて、これから病院を訪れるたびに思い出すだろう光景。

病室の椅子に腰掛け、微笑を浮かべる女。女は若く見えた。二十ほどの、学生といって差し支えない年齢。しかし、何故かもっと高齢の、例えば学校の教師とでも話したようだった。

病室にいる間中ずっと笑っていた、奇妙で——

「髪の長い、女の人？」

「その女だ。家にいたのか？」

その口調は静かだったが、応答を強要する詰問のそれがあった。あえて逆らうことはせず、素直に首を横に振る。あの女を家に迎えるはずがない。

が、コウヘイの返事は男にとって意外だったようだ。聞き返してくる。

「家ではない？ では、どこだ？」

「どこって……」

出かかる言葉を、寸前で押し止める。病室のことを話すということは、母の元へこの男を案内することにもなりかねない。そうすることには躊躇があった。男を信用——危害を加えてこないという程度の信用すら、コウヘイにはできていない。

気まずい空気が数秒流れる。その間コウヘイは口をつぐんでおり、男もまた黙っていた。

その沈黙を破ったのは、それまで蚊帳の外にいたサキだった。

「ちよつと！」

「お前は彼女を知っているのか？ 接触の痕跡は見当たらんが」

「そうじゃなくて！」

コウヘイを押し退けて。威嚇するように——虚仮脅しも良いところだが——目つきを鋭くしたサキが、男の前に歩み寄る。

「あんた何者！？ 聞いてばかりじゃなくて、こっちの質問にも答えなさい！」

「……時間がない。そこのお前、女をどこでみたか教えてもらいたい」

「人の話を聞きなさいよ！」

よほど頭に來たのか、サキは男の腕を掴んで抗議する。だがスポーツをしているだけの女子中学生のサキが、成人しているだろうコートに体力で勝るとは思えない。

「やめ……」

今にも男に殴りかろうとするサキを止めよとして、コウヘイは男の変化に言葉を失った。サキでさえ、啞然としている。

男の腕が、サキの手の中から抜ける。力任せに振り払ったのではない。腕が消えて無くなっていた。

腕だけではない。コートを着た男の姿が、溶けるようにして消え

た。ぶん……と、虫の羽音のようなものが聞こえた。

「この星の住民に干渉したくない。『核心』に俺の存在を知覚される恐れがある――俺だけでなく、お前たちにとっても不利益になりかねん事態を招く恐れがあるということだ。だから、女のことについて話せ」

告げる声がある。

先の続きを語る声に、なんら変化は感じられなかった。ただ一つ、その声が発せられる位置を除いては。

目の前の虚空から、声に遅れてそれは姿をあらわした。サキの前にいたはずの男が、今は自分の前に立っている。電波の悪いテレビのように、体をノイズに波打たせながら、それでも何事もないかのように。

「繰り返すが時間がない」

男が、コウヘイの襟首を掴んだ。静かな口調のまま、恫喝する。

「話せ。彼女は……ちいっ」

淡々としていた男が、急に舌打ちをした。コウヘイを無視し、空を見上げる。

聞き覚えがあった。ガラスに亀裂の入る音。病院で、あの女が空間を割ったときの。

目の前に、ガラスの破片のような物が落ちてきた。それは見る間に崩れて、風に飲まれた。次々と落ちてくる破片の出所を見上げる。「怖がらせちゃ駄目じゃない。あなたは愛想を覚えるべきね」

どこか深い場所から漏れ出てきたかのような、女の声。井戸の底からの響きにも似た声は、頭上の隙間からにじみ出ている。剥がれ落ちる、空間そのものの隙間から。

「なに、これ？」

疑問符をあげたのは、サキだけだった。

ヒビは病室で見たときと同じように空間を侵食し、とうとうそれ自体を砕く。

耐久力の限界を超えて、ガラス細工の空が落ちてきた。白い服を

着た女と一緒に。

「こんにちわ、シリム」

「……ええ。久しぶりです。レアリア」

(……………?)

何故だろうか。

応じる男の複雑な表情の中に、安堵があったような気がした。

『魔族二体が新たに第三防衛結界突破。居住区に潜入。居住区の被害、なおも拡大』

『時空隔壁の修復、未だ難航。箱舟内への更なる侵入を阻めません』

『第六守備部隊壊滅。戦線離脱の許可を求めています』

『第四防衛結界に魔族が到達。結界出力89・7%まで低下』

控えめに言って、これは窮地だった。箱舟の六十年にわたる歴史の中でも、居住区の深度まで魔族の侵入を許したことはなかった。

箱舟内に魔族の侵入を許す事態は、これまでも多々ありはしたが、それらのほとんどは外周部にある第一防衛結界に到達することなく無色の魔法士たちと、守備部隊によって、ことごとく葬られてきた。魔族の進行を阻止するたび延命の報酬を獲得してはきたが、しかし戦闘を重ねるたびに様々なものを削がれていった。摩滅する抵抗力が、魔族の力の前に折れるのは時間の問題ではあったが。

「早すぎる」

止まることなくスピーカーから流れてくる部下たちの報告の声を無視し、うめく。

この聖室は箱舟にある他のどの部屋よりも嚴重に守られた場所だった。ここで語られる言葉は彼の意味なくして外部に漏れることなく、また他者の入室も同じく許されない。いや、この場にいる五人の支配者たちの意思なくして、何者も箱舟には乗り込めない。乗り込んではならない。

四人の大賢者と、それらを束ねる一人の大賢者長。彼らの総意が、

箱舟を動かしていた。

「まだ、早すぎる」

大賢者の長は重々しく繰り返す。

「確かに。我々の見積もりでは、猶予はまだ残されていたはずだ」

「ここにきての魔族の活発化。核心になにか変化があったのか？」

「こちらが無色を五人欠いた状態にあることを知ってたか？　ありえない。核心が動きを見せたのは、淘汰の日に起こったあの一度だけのはずだ」

「ならばこの現状をどう判断すれば良い？　魔族に統率のようなものが感ぜられる。個を持たない木偶が、なんらかの意思に従って動いている」

「魔族の意識領域は全て繋がっている。無数の最強が一人の赤子によって統率されていたようなものだった。その構図に変化が起きたのではないか？」

「無数の最強が一人の指揮官に統率されているというのか？　一糸乱れぬ無敵の部隊か。ふん。それでは我々に勝ち目は無いな。裏切り者を出すような部隊しか率いえない我々では」

「意思が成長してるとして、それにしても急すぎる。先日まで、その兆候すらなかったではないか」

「魔族に成長という概念があるとは思えないがな」

「ともかくだ……」

大賢者長の一言に、それまで飛び交っていた憶測が止んだ。

全員の――その内半分は義眼だったが――視線が集中するのを待って、言葉を続ける。

「現状を打開するのが先決だ。実のない話に時間は割けん。先に繋がる今がなくては、全てが無駄だ」

「策はあるのですか？」

「まずこれ以上の魔族を箱舟に乗せるわけにはいかん。外界と箱舟を分かつ封鎖隔壁の修復を急がせる」

「それなら、最優先で既に」

「行っているか？ そんなことは知っている。我を侮っているのではないなら、貴殿の地位に見合った熟考の後に発言せよ」

声量を変えぬままの静かな恫喝に、齢にして百を越える大賢者がすくみ上がる。彼に謝罪の言葉を口にする猶予すら与えず、続ける。

「その最優先ではまだ不十分なのだ。我等が『イズミ』の処理速度が足りていない。不足分を補う。第一から第四までの防御結界を解除し、それを維持していた分の処理能力を全て隔壁の修繕に回す」

「しかし、それでは箱舟内の魔族が第四区画に集中してしまいます。そうなれば、第五防御結界の崩落は目に見えています」

「第五の後には、『中央』を守る最終防御結界があるのみ。リスクが高すぎるのでは」

「敵の数は無限だ。長期戦で勝ち目はない。リスクを承知で短期決戦を仕掛ける。それに、勝算ならある」

先の脅しが効いているのか、強気な批判を発する大賢者はいない。怯え腰の彼らに、自分を本気で咎めるだけの度胸は残されていないかった。元々が大したことのない意気地は、老いによって次第に萎え、現在では事実上皆無といっても良い。

だが、彼らはそれでいい。糸に吊るされ動く、ただの人形で良い。彼らの度を越えた弱気が、箱舟を大賢者長である自分の思いのままにさせている。

ほくそ笑む余裕はなかったが、支配欲がわずかに満たされるのがわかった。

「コード・138を発令する。存分に力を振るってもらおうではないか」

結界に取り付いた魔族の背後から、渾身の一撃を見舞う。

大魔力を乗せた拳を魔族の後頭部に叩き込み、内部に封入、内側から吹き飛ばす。血飛沫を撒き散らすこともなく、風船が破裂するように頭部を失った魔族は、脱力して四肢を垂らす。抵抗力を失っ

た魔族を、後は結界が始末してくれた。触れるもの全てを蒸発させる結界が、魔族の巨体を分解する。

倒した魔族から意識を外し、箱庭内の惨状に目をやる。

光すら通さない封鎖隔壁により閉ざされ、エネルギーの問題から不十分な照明で照らされる灰色の町。それが箱庭だった。常に薄暗く、昼も夜もないここは、深い洞窟を連想させた。

その洞窟に足を踏み入れ、守り手たちを蹴散らす者がいる。

荒廃した箱庭の居住区に、白い巨人が五十以上も侵入していた。

ある者は空を飛び、ある者は地を歩み、ある者は転移の魔法を駆使して、それら全てが明確な目標を、箱庭の心臓部である中央を目指して進軍していた。信じられないことに。

（これまでにない傾向、だな……）

魔族は自分や他の無色、または守備隊への攻撃を牽制程度に止めている。ただただ真っ直ぐに中央を目指し、結界に取り付いてはそれを突破しようと試みていた。『人』とあればそれが無色の魔法士だろうと、守備隊の隊員だろうと、非武装の一般人だろうと関係なく排除しようとしてきた——排除するために存在してきた魔族が、なにかに引き付けられるように中央に向かっていく。

「多すぎる……」

次の魔族が、結界に接触する。一体の魔族がその存在と引き換えに結界に穴を空け、そこから数体の魔族が突破してゆく。これまで見られなかった連携によって、数を減らしながらも魔族は着実にその侵入の深度を深めていく。そして深度が深ければ深いほど、箱庭にとって重要な区画があった。

これ以上の進行を阻止し、更なる被害の拡大を防がなければならぬ。だが。

『——告げる』

頭の中で声が響く。

（通信か……）

それは空耳でないのなら、司令室にいるのだろうオペレーターか

らの声だった。耳鳴りと共に訪れたその報せに、いぶかしく思いつつも意識を傾ける。

『告げる。無色の魔法士は現戦闘中域を放棄し、第五区画に結集せよ。繰り返す。無色の魔法士は第五区画に結集せよ』

「放棄？」

信じられず、つぶやく。

現戦闘中域から離脱することは、居住区の守備を断念し、無防備にしてしまうということだ。住人はほとんどが地下のシェルターに避難したようだが、魔族の力なら彼らを生き埋めにしてしまうことくらい造作もない。無色の撤退は、魔族に抗する術をこの区画から消してしまうことになる。

（しかし）

今日の魔族は、いつものそれとは性質が違う。人をこの星から抹殺することが目的であろうことは変わらないが、その過程である手段の、効率という点が改善されている。中央を目指し、箱庭の誇る最強の盾である時空封鎖隔壁を剥ぎ取ろうとしている。盾を失えば箱庭は避難所としての役割を果たせず、この惑星にそれこそ星の数ほど存在する魔族の総攻撃を受ける。それを狙ってだろう。魔族はひたすら中央を目指している。

恐らく戦闘さえなければ居住区を攻撃することはない。中央が無事である間は、だが。

（ここで戦闘を行えば、住民に被害が出る。ここは一度引いて、第五区画で魔族を迎え撃つ。第五は研究施設が密集した地域。人的被害は少なく済む。ただ）

もう一度、箱庭を見渡す。これまで見たこともないほど大量の魔族の進軍。それら全てを、中央とは目と鼻の先の第五区画で打ち倒さねばならない。言うまでもなく至難である。

「やはり、多すぎる……」

「びびったんならさっさと消えろよ、アルバ。弱卒は足を引っ張るからな」

彼の独り言に、わざわざ応じてくれる親切な声がした。痛み入るすぎて、かえって腹立たしくある低い声が。

「……クルシヤラか。相方のカーベスと一緒にじゃないのか？」

「別行動だ。撃墜数を競ったゲームの最中だったんでね」

背後から回りこんできた男が、彼の――アルバの前に現れる。服は無色の魔法士の証明として当然白いのだが、彼の場合、その素肌さえも生気を感じさせぬほどに白く、頭髮もまた白い。色素のない肌に痩身の体軀も相まって、クルシヤラの姿は病人――あるいはそれを通り越して亡霊のようでさえあった。

「ゲームというのは、いささか不謹慎ではないか？」

「楽しまない人生なんか生きてる価値がねえよ。どうせ先が短いんなら、なおのことだ。誰かみたいに、ただ死んでいないだけの人生なんざまっぴらだね」

「なら、その自分の生命さえ投げ出して戦う『誰か』を、もう少し見習うべきじゃないのか？」

「はっ。死なないために生きるなんて御免だ。生きるために生きるのも同じく」

長くこの男と関わっているが――

それが満面の喜色であることを悟るまで、やはり一拍の間を必要とした。クルシヤラの顔が、奇怪に歪む。それは顔の筋肉を痙攣させる、病人の笑顔だった。

生者を後退させる死人の笑い。その笑いの合間に差し込むように、言葉をつづる。

「どうせ死ぬまで生きるんなら、俺は生きるために死ぬ。死ぬまで楽しむのさ、俺は。生を実感するぎりぎりの極限の中でな」

言い終わると、クルシヤラは姿を掻き消した。とうとう成仏して天にでも召してくれたのかと期待したいところだが、どうやら指示された第五区画に向かったようだ。後に、笑いの余韻だけを残して。
「……嫌な空気だな」

戦場にこびり付く、死霊の哄笑。それはある種の呪いのように、

アルバには感じられた。死人の語る生と死は、底知れぬ怖気を与えて箱庭の地に染み込んでいった。

言いたいことは幾らでもあったはずだった。

胸中で渦巻く無数の疑問を、この場でぶちまけることもできる。怒号を叫ぶこともできる。非難することも、蔑むことも。言うべきこと、言いたいことが山積していたはずだ。だが。

「こんにちは、シリム」

「……ええ」

不思議と、心が静かになる。先ほどの焦燥も消えている。

「久しぶりです。レアリア」

ゆっくりと虚空の断裂から抜け出て降りてくる彼女に言う。

軽く舞い降りるレアリアは、家の門の上に降り立ち、そのまま腰を下ろした。シリムとレアリアが、現地人の少年を挟んで対峙する。二人の魔法士に挟まれた少年は、落ち着きなく視線をさまよわせている。

「コーダは帰還したようですね」

「あなたより一足先に、ね。家に帰れば、すぐまた会えるわよ」

「でしょうね。できれば俺がコーダたちと再会する際には、あなたにも同席していてもraitたい」

「遠慮しておくわ。家に帰ると、老人たちの愚痴を聞かされるじゃない？ 嫌いなよね、あの年寄りたち」

「俺もです。好いてる者などいない。しかし、あなたを箱庭にとって欠かせない人間だ。箱庭に戻って職務に復帰するなら、多少のペナルティーを科せられる程度で済む」

「私は優秀だからね」

悪戯っぽく笑う。

いつも笑っているのに、彼女の表情は何故か多彩に感じられた。笑みの種類を使い分けることで、その心情を表現している。その表

情が、心情とやらを素直に表してくれているのならの話だが。

「でもね、シリム。だからといって、私が箱庭に戻る理由にはならないわ。違う？」

「もとより説得できるとは思っていない。断っただけです。力づくで連行する前に」

「できるのかしら？」

「今は不可能だ」

断言する。不甲斐ない台詞をここまで堂々と言い切る自分が情けなくはあったが、虚勢をはる必要もない。

「それでも、私に挑む？」

「勝てないとわかって、なお足掻く。俺たち箱庭の民らしいじゃないか」

「でも、あなたは無駄な足掻きはしないんでしょ？」

答えずに、シリムは魔法式を構築する。瞬間の時と空間を保存し、部外者を排斥する結界。偽りの空間の生成。

掌の上で光が球体を形成した。核心の大領域という触覚に感知されることなく、この星で魔法戦を行うにはこれを展開しなければならぬ。この星の住民に損害を出すのが好ましくないという理由もあるにはあるが、なにより現存する敵勢力を二つに増やさないための処置だった。

時空封鎖の魔法を展開する。

呆然と彼らのやり取りを眺めていた二人が——そこにいることを半ば忘れかけていた少年と少女の姿が消える。封鎖空間内への侵入を許さなかったため、現実に取り残されたのだ。少年のほうにはまだ聞いておきたいことがあったが、今はそれもできそうにない。

そんな余裕は、彼女が与えてくれそうにもなかった。

レアリアの笑みが、可虐的なものに変わっている。不気味に蠢く漆黒の闇が、彼女の影の中から溢れて世界を食らった。

魔族よりも深く重い脅威が——闇の支配者が、その力を解放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5031a/>

無色の魔法士

2010年10月28日03時05分発行